

待降節第1主日 B年

第一朗読 イザヤ 63・16b-17、19b、64・2b-7

第二朗読 一コリント 1・3-9

福音朗読 マルコ 13・33-37

2023.12.3 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

昌川 信雄神父(クラレチアン宣教会)

今日から一年の始まりで、待降節を迎えます。子どものときからわたしはこの待降節が一番好きでした。なにか一番信者らしい生活が振り返ることができる季節だからです。ご存知のように、待降節とは、マリア様が生きたように、目を覚まして神様の到来を待ち望む季節です。

マリア様は神のみことばを前にして、自分の思いに死んだ人です。自分の思い、つまりわたしたちが自我と言っているものです。この自我に死んで、聖霊を頂き、世に御子である救い主をもたらしたお方でした。

同じように、わたしたちキリスト者も、マリアとなって世に救い主をもたらすよう招かれた存在なのです。このマリア様をして、聖アンブロジオという聖人は言っています——アンブロジオはアウグスティヌスを回心させた司教さんです——この方が言ってるんです。「わたしたちはみんなマリアにならないといけない。しかし誰もマリアになりたくないのです」と。マリア様になりたくないのは、神様のことばを全面的に受け入れるためには、自分の思い、自我に死ななければならないからです。これを問われると、みんな尻込みするんです。自分の思いで生きて行きたいですから。

この自我というのは、アダムの子以来、神様の聖寵を失った人間の本性、すなわち、自己保身と自己中心性であるエゴイズムです。だから、わたしたちはエゴイズムでこの世で生きている存在なんです。

聖霊は、このエゴイズムのない空っぽの器に注がれます。だからわたしたちが自分の思いで生きていながら「聖霊来てください」と言っても、わたしが自我でいっぱいである限り、聖霊が入って来れないんです。自分の自我で満たされながら祈っていたら、何も神様に届かない。これをわたしたちが気付かなければなりません。

マリア様の子イエズス様も、ご自分の受難を前にして、上りたくないという自分の思いに死んで、十字架に上りました。そして十字架の上から、わたしたちに「わたしのお母さんの子どもになってください」と諭して、復活への道を示し、今お母さんであるマリア様と共に天で待っておられるのです。

この天におられるイエス様とお母さんであるマリア様にわたしたちが繋がるために、わたしたちが今しなければならぬ、地上での唯一の仕事は何でしょうか？ それは、自我の衣を聖霊の衣に着替えて、霊的な人になることです。

皆さん「霊的な人」と聞くとどう思われますか？ 教会には宗教的な人は非常に多いんです。宗教に携わって、それを道具にしている人たちです。しかし、霊的な人というのはほとんどいないと言われます。わたしも含めて、これはほんとに耳の痛い話です。

何故かという、地上にはいわゆるサタンが提供する魅力あるものが溢れているからです。わたしたちはもともと幸せになるために創造されました。一人ひとり、誰もが最終的に幸せになるために神様はわたしたちを地上に生まれさせました。しかし、地上には本当に幸せになるものと、幸せのようなものがいっぱいあるんです、サタンのお陰で。サタンは幸せのようなものをいっぱい振りまいて、わたしたちをだまそうとしているわけです。

ここに来るまでも、たとえば電車に乗ったりバスに乗ったりしてますと、その座席のほとんど100パーセントの人が、昔は指でまさぐっていたのはロザリオでしたけど、今はこの指で小さな板をまさぐっているんです。これ、「悪魔のロザリオ」と言ってるんです(笑)。そして、そういう人たちが一心に見つめて、もう神様に祈るよりネット検索のほうが手っ取り早いと言うんです(笑)。こんな時代です。それで幸せになれると思ってるんです。しかし、幸せのようなものというのは、手にすればもっともっと欲しくなって、果ては破局に至るんです。

ほんとの幸せって何ですか？ それは、みんなと共有、共生できるものです。愛と家族とか、平和とか命とか、協力とか介護とか、そういうものです。自分中心じゃなく、相手サイドの生き方にあるんです。

さて、わたしたち、この世界は神様から与えられた自由で神様に背いて不幸を招いて、神様に泣きつくしかなくなった人類の不始末の尻拭いにイエス様が来られると知ったら、わたしたちは大急ぎで部屋の片付けに取り掛かるんでしょうか？ それもいいですけども、もっと肝心なことは、本当のいのちを生きる者となるために、いのちへの回心の恵みを、砕かれた心で、マリア様のように謙虚に願う心です。それが一番必要じゃないでしょうか。

人類が犯した不始末とは、これはあとの(黙想会の)話で詳しく出てきますけども、善悪の知識の実を取って食べたという、もともとすべて良かった神様の価値観の値ぶみをし直した、そして樂園からこの世に追い出されたことになった、あの根源的な罪です。これがわたしたちが犯した不始末です。

この不始末を取り除くために、親である神様自身がわたしたちのところに来て背負おうとしておられるんです。そして、第一朗読にもありますように、わたしたちは、陶工に形造られた粘土に過ぎません(イザヤ 64・7)。この世の主人公は、世界の創造者である神様です。わたしたちはあくまでその脇役なんです。全体の筋書きも主人公に必要な資質も持っていないのに、脇役であるわたしたちが主人公である神様を押しつけて前に出たことで、たちまち世界に混乱が始まるんです。与えられた管理者の立場を捨てたこの脇役たちが主役争いで、愛の関わりというのがもう弱肉強食へとゆがめられて、收拾がつかなくなっている世の中です。

そんな世界を救うために神様がこの世に来られることになったとき、神様としてではなく人間の姿をとられたのは、裁判官としてではなくあくまでわたしたちの自主性を重んじた父親としての道を、子として歩んでもらうためでしたが、救い主である人の子イエスは宗教の指導者たちから自分たちの立場を危うくする存在として排斥され、そして、十字架に架けられてしまったのです。

罪の世界で正しく生きようとする者には必ずと言っていいほど迫害があるのは世の常のようです。そして、この人類の罪を背負った救い主であるキリストが世に来られる計画を最初に知らされて、待降節を世にもたらすことになった人物は MARIA 様でした。この MARIA 様を、わたしたちはイエス様からお母さんにいただいているんです。お母さんは、我が子を絶対に見放しません。必ず我が子を救うために見守ってくださいる人です。

お祈りいたします。

「待降節を最初に生きた母 MARIA 様、わたしたちはあなたの子どもとして、あなたを生きることによって御子イエス様を賛美する者となれますようお導きください。」

ご聖体をいただくときに、いつもこの願いを MARIA 様、そしてあなたの守護の天使にお願いいたしましょう。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>